

2008年3月 第11回定例研究会

報告：座談会

「ダンサーが教壇に立つとき」

3月2日14:00～15:30 1階映像ホール

ゲスト講師 勅使川原 三郎

(舞踊家・立教大学教授)

聞き手 片岡 康子 若松 美黄

第11回定例研究会は、3月2日に彩の国さいたま芸術劇場にて、埼玉県舞踊協会と(財)埼玉県芸術文化振興財団の主催する「ダンスセッション2008」にタイアップする形で開催されました。午前中は修論発表、午後は、大学競演ショーケース、続いて立教大学現代心理学部映像身体学科の皆さんが先生である勅使川原氏の指導を受けながら、普段行われている授業の様子を再現するデモンストレーション。最後に、勅使川原氏をゲスト講師にお迎えしての座談会が行われた。

座談会概要

*座談会で話された内容をもとに概要を報告する。

文中氏名表記は、勅使川原 (T)、片岡 (K)、若松 (W)、ワークショップはWS、コンテンポラリーダンスはCDと略記する。

W 「ダンサーが教壇に立つとき」ということで、勅使川原さんにお話を伺っていきたく思います。

T 僕は立教大学で舞踊の教育に携わっている意識はないのです。映像身体学科においては、映像、身体の中の視覚について研究しようとしています。身体を学ぼうということにおいて、ダンスをしてきた勅使川原はどうなんだということですね。カリキュラムはWSと理論の二本柱になっていて、WSは先ほどお見せしたように、主には映像(視覚表現)作家になりたい学生たちに教えています。そこではダンス・舞踊という言葉は使わず、身体訓練ということで行っています。身体がどのように動けるようになると良いのか、表現にまで行きついていない、行きつく前に勉強することがあるのではないかと、ということをやっているわけです。

W 舞踊そのものが舞踊教育という幅で収まるかはわからないですから、広がりのある視点において考えるということはとても良いですね。

T 映像身体学科では、映像関係実習、編集機材、上映システム、舞台表現技術、心理学、歴史などが科目にあります。それぞれが目指す方向はいろいろであっても、その基礎学習として学ぶ。ダンスを志向する学生にとっては、映像、心理、歴史などの学習ができる場としては面白いと思います。

K 日本では、学校におけるダンスは、創作ダンス中心に行われてきましたが、現代の子供たちの

身体の硬直化・コミュニケーション不足などの状況に対応するために、「体ほぐし」という学習が設定されました。勅使川原さんの先ほどのご指導は、心身をほぐして行く活動に近いと思いましたし、今のお話は、人間の基底となるからだをたもたえておられると感じました。

T 身体をほぐす、ということ思い出したことがあります。10代の頃、あるきっかけで、若松先生の指導を見たことがあります。その時、それを感じたのです。ダンスってなんだろうと思って出かけて見たのです。すると「トンツクトントン」というリズムを延々と続けている、という指導。ナメクジが飛んでいるような動き、トンツクトントンと体のもっている質感がすごく強烈に残っている。19歳くらいの頃ですね。

W そんなことがあった? 僕は雑賀さんのところでの話を思い出した。盲腸手術の傷痕が開いたという話し…。

T 踊りを全く考えていなかった頃、何かを調べて退院した翌日に雑賀さんの研究所に行ったのです。そこでバーに掴まってぐっと反った瞬間に傷口が開いてしまった(笑)。そんなことがありました。

W 従来からのからだの訓練はこれで良いのか、ということを考える必要があります。先ほどの指導では、いきなりダッシュさせていましたね。これはかなり重要なことだと思います。ストレッチしてから動くということは必要なのでしょうか? 人間の体はいつでも突然の状況に即対応できるようにできているのではないですか? そのような意味でいきなりダッシュさせたことは面白かったです。妙に訓練されてしまうということはどうなのかと、考えてしまいます。

T 技術の問題はなかなか難しいです。

W まずそれよりも舞台の上で立っている存在かどうかが、テクニックの前に重要ではないですか?

T 技術と表現・創作ということでは、技術と表現は別ですね。表現とは何かということ、表現以前に何かがあるか。また技術という、あらゆるものが技術になりうるということからすると、表現する内容の部分も考えなければならない。僕は、技術だけを見せる表現ということはいらない。表現ということだけを洗ひだします。直観的なものだけに頼らないで、綿密に感じていこうとする経験を大事にするべきではないかと思えます。しかしそこは表現に結び付かないので、みんなはあまりそこをやりたがらない。身体の知覚、表現、は医療の分野でも頻繁に使われている言葉です。し、(ダンスのことだけを考えるのではなく)日常におけるコミュニケーションという次元から技術や表現を検証していかないとだめだと思います。例えば、他者との関係の技術、自分のなかの自分を

探る技術、そうした技術があると考え、それをもっとやっても良いのではないのでしょうか。ダンスが好きではない人がダンスをできるというのが面白いし、ダンスファンだけのダンスではなく、批評性、つまりダンスの面白さをみる、ダンスを知るために、ということがないと駄目です。

K 今、勅使川原さんは「空気のダンス」という中高生をダンサーにした企画（2007年10月からWS開始、勅使川原氏のダンスメソッドを学び、新しい作品を創作する長期プロジェクト）を進めておられますね。

T 13-18歳の若手をオーディションで選び、WSを経て、作品を創り、舞台（新国立劇場、2008年4月4-6日）にのせるという企画です。なぜこのような若手を対象にする企画に興味があるかという、若い世代にもっと面白いことをやってほしいからです。彼らを見る時、約束（事）があると思ってみることはないですね。約束されていない（未知の）ものにいかに関心することができるか。それは多少歳をとっている人がやるべきであると考えています。

K 今、幼稚園から小中高まで、表現・創作ダンス、フォークダンス、リズム系ダンスなどが教えられていますが、勅使川原さんは子どもたちを対象にしたWSをされていますね。

T これまでに、埼玉芸術劇場主催の小学生対象のWS、13-18歳のWS、自分のカンパニー「KARAS」でのWS、またパリ・オペラ座でのWSいろいろな対象に行っています。でも、僕は全部同じことをしています。つまり何が大事であると思っているかという、作品を作るための準備としては、そこに生きているものは自分であるということを経験・準備するべきだろうと思います。ある名前・年齢・肩書き・立場を持った自分から離れて、つまり子どもでもある、中学生である、ダンサーである、70代である、ということと離れると、動いている感覚、何かを生み出そうとしている現時点のからだに気づいていく。すべての人のからだは同じだと思うからです。

K 同じことを指導されても、対象によって、WSプロセスは異なるのではないのでしょうか？

T 例えば、バレエダンサーを対象にした時、日常の行動とバレエ的動作は異なっていて、外側に向いてしまっていて、内側の筋肉が弱くなっている、親指側の重心の掛け方が弱い。そのようなからはバレエにおいては強い、しかし緩めるとO脚、からはボロボロなど、内側に締めるということは日常的にはできていない。また素人は、つま先を伸ばしたデベロッパはできないけれど、膝をゆるめて呼吸を合わせて膝を挙げると、オペラ座のダンサーより上がるということがある。技術の習得を否定しているのではありませんが…。

K WS前後で、受講者はどう変わりますか？

T フランクフルト・バレエ団でのWSですが、フォーサイス氏は、WSの後にダンサーの動きが良くなったと評しました。僕のWSは形をつくるのではなく、呼吸の使い方、タイミング、からだの使い方、それらを綿密に行います。つまり、他にも応用のできるものなので、そのバレエ団の中心メンバーは、その後重要な仕事をしていますし、あるいはジャンプがすごく飛べるようになったという例もあります。その人の持っている体のマックスがどこまでかということが、のびやかにコントロールできるようになったと言えると思います。

W 良いダンサーにするためのアドバイスを具体的にすることができますか？

T できますね。まず目の前のダンサーをどういう風に見るかということ、こんなことがあります。脳損傷の治療現場に行った時、僕がどのように見るのかを聞かれたのですが、僕はからだの中に何が起きているのだろうかを見ていますと答えました。その見方と治療のアプローチの仕方は近い。治療は、筋肉と関節の問題だけではない、動機づけられて体を動かそうとするのはからだの内側の問題です。つまり、その人が何をしようとしているのかを見る。アドバイスの時に重要なのは、かれらがどのようにしようとしてそれができないのか、そのためにどのようにからだを使えばよいのかですね。僕には、この基点から次の基点にどう動いたらよいかが見えるので、それを求めていけば必ずできる、という考え方です。より高く飛べ、という言い方はしません。

W 筋肉の内側はなかなか自分自身が統御できない。自分自身がどう考えながら、どう考えないか、それが難しいところです。

T 稽古であらゆる状況に打ち勝つだけの稽古をしていれば、舞台上でアガルということはない、力を発揮できないということもないです。

表現者はある種特殊です。技術と表現は分けて考えています。表現というのはもっと恐ろしいものだと思います。内側の他者は良いとして、それ以外の他者を寄せ付けたくないくらいの恐ろしいほどの気持ちをもって、純度を高めて舞台上に臨みたいと思っています。最後に観客とは交流するのですが。

W 創作、振付についてはどうですか？

T 時間をかけてやりたいと思います。いろいろなことが起こり得るけれども、技術がそこには（必要）ないと思っている。僕は表現ということになると、突然厳しくなるのです。（創作において何が新しいかどうかなどは言いたくないですね。）

W 日本の中でのことについて、いろいろ考えてみましょうか。日本の舞踊状況はどう見えていますか？

T グローバルという面で見るとしたら、劇場空間、制作、社会などを視野にいれる必要があります。舞台だけが表現であるとは思わない。観客とは、マスコミ、批評家が論じることなどを考えると重要な役割をもっている、それらも含めての舞踊環境ということを考えています。7年雑賀先生のところでバレエを習って、日本の中で何をやって良いのかわからないので、外を見てみようとしてフランスに行きました(1980)。見たのがアメリカンモダンダンスっぽいダンス、芝居も観た。でもあまり新しいものがなかった。ムードラに日本人が3人くらいいて、10代の若者が毎日ダンスづけになっている恵まれた状況を見た。ベジャールが《魔笛》をつくっていた頃ですね。彼らは舞台のない時には、いろいろなダンスを生き生きと踊ってダンスを楽しんでいる、なんて良い場所なのかと思ったのです。日本に帰って来たとき、そのような恵まれた環境がなかった。先生は要らないからゼロから自分で作ろうと思った。(日本では、舞踏、CD、などいろいろなスタイルを気にしていました。)日本で初めて公演をし始めたのは、渋谷のアングラのような空間でした。強烈な役者の人たちとの交流があって、ムービングアートとか言って、ダンス界とは関係のないところでやっていました。長谷川六さんに、パニョレのコンクール(1986)に参加しないかと誘われて参加。コンクールで2位。振付作品じゃなくて即興が入っているから2位と言われた。その後、ヨーロッパでの仕事が多くなって行きました。日本でやった時には、最初はダンスではないと言われましたね。グループ、セクトから離れていたいと思っていた。それは自分にとってはある意味「表現」でした。

K 1986年は、日本のCDの起点と言われてもいるので、勅使川原さんのパニョレ受賞は、日本のCDにとって大きな事件でした。

T バレエの絶対性は尊敬している。だけどそれだけでは足りない。いつまでも500年前くらいに成立したシステムを永遠にやる意味があるのだろうか。若い人たちに何を伝えたいかという、自由の問題というよりも、からだはどのように形作られていくのか、どのように動けるようになるのかです。つまり、どのようにすればよく動かせるのかという判断を教えるべきだと思います。その判断は、人間が生きていくうえで重要なことだと思います。モダンダンス、CD、とか言う区別をつけるのではなく、「ダンス」という用語で捉えたいです。

K 10代のダンサーたちとWSして、今、舞台づくりをしておられると思いますが、どのように彼らは変わっていきますか？

T モダンダンス風、CD風、大学ダンス風になっ

てしまうのは惜しいと思うのです。そのようなものから抜け出さなければならない。もっと歴史を学び、形式を学んだほうが良い。「空気を踊る」では、なぜ中高生を対象にしたかという、赤ちゃんから大人になるまでの人間は成長を続けている、それをあるスタイルにとどめてしまうのはもったいない。純粹なものは何かを求め続けることが大事、それがどこまでも連なっていったら面白いだろうと思うからです。かれら10代は体力的にも面白いですね。1時間でもジャンプを続けることができるし…。隠れて無名な人でも大事な人がいる、何をよしとするのか、それを明確に発言するべきだと思います。

W 話しが佳境に入り大変に面白いところに来ています、時間もやってまいりましたので、最後に一言お願いします。

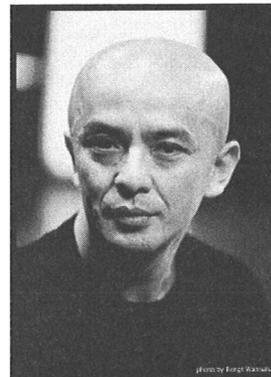
T ダンスのことを話すのは難しいことですが、文字でも…。しかし表現者として思考する側にいて、言葉としても戦っていかなければならないと思っています。

K 大変に貴重なお話を伺うことができ嬉しく思いました。本当にありがとうございました。

W 勅使川原さんは、この後、オーストリアに出発されるというご多忙な予定の中、お越し頂きました。ありがとうございました。

(文責 片岡康子)

《勅使川原三郎氏プロフィール》



舞踊家。振付家、演出家。クラシックバレエを学んだ後、1985年、宮田桂と共にKARAS設立。既存のダンスの枠組みではとらえられない新しい表現を追求。以後現在に至るまでKARASと共に毎年、欧米主要都市の劇場や国際的な芸術祭に招かれて公演ツアー。その徹底した美意識と比類ないダンスは絶大な評価と支持を受けて、ダンスシーンの先頭に存在し続け、多大

な影響を及ぼしている。世界の舞踊団、著名なバレエ団に招かれ作品を多数創作。またその類まれな造形感覚をもって舞台装置、照明デザイン、衣装、音楽構成も手がける。ダンス教育に関しても独自の理念をもち、ワークショップを通して国内外の若手ダンサーの育成に力を注ぐ。2004年にはローレックス・メンター&プロジェクト・アート・イニシエイティブのメンター(指導者)を委託され、1年間に渡り若手芸術家育成支援事業に関わる。その他執筆活動も行うなど、その幅広い活動は芸術表現の様々な局面で常に新たな可能性を切り拓いている。2006年度から立教大学現代心理学部映像身体学科の専任教授に就任。平成18年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。